

Malassezia furfur の検出に苦慮した一例

◎加藤 麻美¹⁾、喜田 明日香¹⁾、伊藤 優里¹⁾、原 和也¹⁾、大堀 愛¹⁾、南谷 健吾¹⁾
社会医療法人名古屋記念財団 名古屋記念病院¹⁾

【はじめに】*Malassezia furfur* (*M.furfur*) は皮膚の常在菌で有り、体のいずれの部位にも存在する好脂性酵母様真菌である。代表的な感染症として、血管カテーテルを介した深部感染症としてのマラセチア菌血症などがある。今回、我々は PICC 採血の血液塗抹標本で酵母様真菌の貪食像が観察されたが、検出までに苦慮した経験を報告する。

【症例】80 代男性。X 年 9 月、前医にて汎血球減少を認めたと経過観察となっていた。同年 12 月前医受診。貧血増悪・血小板減少を認め、精査目的にて当院紹介。後日、急性単球性白血病と診断され、治療のため PICC を留置。入院 1 ヶ月後より発熱持続。2 ヶ月後、PICC 採血の血液塗抹標本より酵母様真菌の貪食像を認めたと、末梢採血の塗抹標本では認めなかった。

【微生物学的検査】PICC 採血の血液培養 (BACT/ALERT) は 3 回提出されたが、陽性化せず。3 月 Y 日：PICC を抜去し培養実施。グラム染色 (フェイバー G) 鏡検では認めず。翌日、バイタルメディア羊血

液寒天培地と CHROMagar Candida 寒天培地では培養認めず。K1.H チオグリコレート培地による増菌培養は発育を確認。Y+3 日：平板培地上に微小コロニーを観察。グラム染色を行い、これまでの経過と形態から *Malassezia* 属を疑い、菌種同定を外注。MALDI Biotyper にて、*M.furfur* と同定された。

【検討】サブローデキストロース寒天培地に約 1mL のオリブオイルを添加し培養を実施。翌日に微小白色コロニーの形成を認め、3 日間の培養では大きく発育した。

【考察】血液塗抹標本にて酵母様真菌の貪食像が認められたが、*M.furfur* の検出までに苦慮した事例であった。本菌の発育には油脂成分が必要なため、通常の血液培養では検出は不可能であったと思われる。血液担当者から報告を受けたことで、*M.furfur* の検出に至ることができた。これからも検査室内での連携をより密に保つことが大切だと感じた。今後は、質量分析法の院内導入や専用培地の採用を検討していきたい。

名古屋記念病院 臨床検査部 052-801-5724